結婚式

結婚式

Aya

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22905819

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, アバン, ダイの大冒険

ヒュンマ「想いの行く先」novel/17529316　の二年後くらいの話です。

結婚式

◇ネイル村◇
　結婚式の打ち合わせが、これほど時間がかかるものだとは思わなかった。マァムの祖父の後を継いだ神父様が、結婚式を執り行ってくれることになってはいたものの、準備しなければならないことが山のようにある。誰を招待するかを決め、招待状を用意する。会場や食事をどうするか、という問題もあった。
「晴れていればガーデンパーティーのように、外にテーブルを並べればいいと思うの。テーブルは食堂のを貸してくれる…っておじさんが言ってくれたし。でも、雨の場合はどうするか、難しいな…」
「ポップに頼んだら、やってくれそうだな。」
「ラナリオンね！雨を降らせるところは見たけど…晴れはどうかな。」
オレの冗談にマァムが笑う。地底魔城のあの日から、ずいぶんと遠くまで来たのだ…と感慨深い思いがする。
「雨なら、食堂を借りる感じかな。それで入りきらない人は、うちに来てもらうのはどう？せまいけど。食事は食堂から運べばいいし。私たちも両方の会場を行ったり来たりすればいいし。」
雨の中、ウェディングドレスのまま、大皿の料理を運搬するマァムのイメージが浮かんで、思わず笑ってしまう。
「何、笑ってるの？」
「どんな状況でも臨機応変に対応するところが、マァムらしいと思った。」
「それ、本当にほめてる？」
「あぁ。」
オレの返事を聞いて、マァムは満足そうに微笑んだ。こんな風に微笑んでくれる時、胸の中に温かなものが満ちていく気がする。マァムの隣に居るのが、オレで良かったのだと思える気がする。
「誰を招待するか…って難しいね。」
「マァムは、どうしたい？」
「私は…村の皆にお祝いしてもらえたら…うれしいなって思う。

ヒュンケルは？」
「オレは、マァムがやりたいことを全部かなえたい。結婚式の主役は花嫁だとアバンも言っていた。」
アバンの名前を聞いて、マァムが小さく息をついた。
「…アバン先生、来てくれるかな…？」
「どうかな。オレたちの先生である以上に、アバンは今、一国の王配という立場だ。参加は難しいかもしれない。」
「ここで、考えてもしょうがないわね。とりあえず、招待状は出しましょう。メルルとポップとダイでしょ、それからクロコダインにマトリフおじさん……レオナは難しいかな？」
「アバン以上に多忙だろうな。アバンにはフローラ様がいるが、レオナ姫はひとりだし…」
「あ…そういえば！」
何かを思い出したように、マァムが招待客リストから顔を上げた。
「結婚式の入場の段取り、神父様から聞かれていたんだった！」
「入場の…？」
「うん。この地方の結婚式では、神父様の前で花婿が待っていて、そこに花嫁が入場してくるの。で、普通だと父親が花嫁の手をひいて、花婿の隣まで連れてくるのね。でも、お父さん、いないでしょ。だから…誰に連れて来てもらうか…って決めなきゃ、なの。」
「代われるものならオレが代わりたいが…」
「ヒュンケルは花婿さんでしょ！もう、冗談ばっかり！」
マァムが大きな声で笑った。冗談を言ったつもりではなく、本気だったのだが…。
「まぁ、お母さんに頼んでもいいし、お母さんがだめでも、私が自分で歩いていけばいいんだから！ちょっと他とは違うかもしれないけど！」
「ひとりで歩いてくるのも、マァムらしい感じがするな。」
「あなたがそう言ってくれるの、なんだかうれしい！」
とびきりの笑顔がいとおしくて、思わず抱きしめる。
「ねえ、ヒュンケル…」
マァムの瞳にオレが映っている。

「いろんなこと考えるの、大変だし忙しいけど…でも、幸せな忙しさだね！」
「あぁ、そうだな。」
腕の中の大切な…大切なひとに、オレはそっと口づけした。

◇カール◇
　来訪はあらかじめ知らせてあったから、城に着くなり執務室に通された。
「ヒュンケル、いらっしゃい。来てくれて嬉しいですよ。」
テーブルには果物とケーキが用意され、アバンが笑顔で迎えてくれる。この部屋に入るのは、騎士団を辞めることをアバンに伝えて以来だから…もう半年ぶりだ。
「ご無沙汰しています。」
「元気そうで、良かった。マァムは元気にしていますか？」
「はい。マァムも、レイラさんも、みな元気です。」
オレの言葉に、アバンが嬉しそうに頷いた。
「ネイル村の空気があなたには合っているみたいですね。顔色もいいし、表情が穏やかで満ち足りている感じがします。」
ネイル村の果樹園で働きながら、収穫物の販売のため市場に通う日々は、空っぽの心に少しずつ何かを満たしてくれるような充実感があった。『戦えないこと』に気落ちしていたオレに『戦わない生き方』を教えてくれたのが、ネイル村の暮らしだったのだろう。運命に翻弄されるような人生の最後の住処が、ネイル村であり、マァムとの暮らしであること。それは、とてもしあわせなことだと思えた。
「今日は、先生にお伝えしたいことがあって来ました。」
「そうでしたね。手紙には何も書かれていませんでしたが…」
「来月、マァムと結婚します。」
アバンは何も言わず、オレの手をとった。
「おめでとう…！やっと決心がついたんですね。」
「はい…。マァムのおかげです。」
マァムを幸せにしたい…という思いは、戦いのさなかから心の中にずっとあり続けた。でも、それをするのは、オレ自身である必要は

ない。そう、思っていた。ポップがマァムを幸せにしてくれるなら…マァムが愛するひとと幸せになってくれるなら、それでいいと思っていたはずなのに。
ネイル村でマァムと再会した瞬間、気がついた。丘の上で、オレを見つめる彼女を見た時、自分がマァムをすでに愛していたのだとわかった。マァムは、自分が告白したことでオレの気持ちが変わった…と思っているようだが、そうじゃない。ずっと…ずっと愛していた…。でもその事実を認めようとしなかった。あの日、オレはやっと、真実に向き合う勇気を持つことができた。
「それに、先生も…背中を押してくれたから」
「少しでも、役に立てたのなら、良かったです。」
騎士団の職を辞してネイル村で暮らした半年は、自分を納得させるための時間でもあった。地に足のついた暮らしには縁がなかったから、それができる自分であることを確認したかった。
「…実はね、あなたとマァムが結婚してくれたらいいな…って、ひそかに思っていました。二人とも、私にとってはかけがえのない存在で、幸せになってほしい…って思っていましたから。ふふふ、ポップには内証ですよ？」
アバンが悪戯そうな笑顔を見せた。ポップとメルルが付き合っている話を聞いて、そんな軽口をたたいているのだろう。マァムとの結婚が、アバンへの親孝行にもなるのだ…と思うと、ほっとしたような気持ちになる。

「先生…実は、今日はお願いしたいことがあって…」
「おや、あなたからお願いなんて珍しい。何ですか？」
「結婚式のことなんですが…」
オレは、気にかかっていた心配ごとをアバンに話し始めた。

◇ネイル村◇
　天高く、鳥の声が聞こえ、見上げると澄み切った青空が広がっていた。教会やその周辺には、多くの人が花嫁の登場を待ちかねていた。レイラさんのウェディングドレスを縫い直した純白のドレスは、とてもよくマァムに似合っていた。

「とても…きれいだ。」
「ありがとう…」
ヴェール越しに見えるマァムの表情はとても静かで美しい。
村の慣習で、母親がエスコートするのは難しい…ということになり、花嫁の案内役は別に依頼することになったのだが、まだ到着していないようだ。家の外で、移動呪文特有の空気が揺れる気配がした。
「遅くなって、すみません！」
ドアを開けて入ってきたアバンに、マァムが目を丸くしている。
「アバン…先生！？招待状、披露宴欠席…って書いてあったのに…！」
「披露宴の途中で帰らなければならないので…食事の手配とか大変でしょうから、欠席ってお知らせしておいたんですよ。書き忘れましたけど、結婚式にはもちろん『出席』させていただきますよ！そして、不肖、この私が、ロカの代わりにエスコート役、つとめさせてもらいますね。」

「マァムを驚かせたいから、秘密にしておきましょう」というのは、アバンの提案だった。昔から、こういう演出が好きなひとだったから、意外ではなかったが。だが、アバンからの『欠席』の返事を見て、マァムが思わず涙した時には、アバンの大人げなさに少し腹をたてた。でも、今、喜びで輝く笑顔を見た瞬間、サプライズも良いものかもしれないという気持ちになる。

アバンの到着を見届け、オレはひとり教会へ向かった。正面は大勢のひとが待ち構えているので、裏口にまわる。それでも、オレの姿を見つけて、多くの人がお祝いの言葉をかけてくれた。

いよいよ、結婚式が始まる。
客席には、懐かしい仲間たちの姿が見えた。神父の前に立って一礼し、花嫁が来るのを待つ。教会の外から、ざわめく声が聞こえてきた。拍手や歓声が徐々に大きくなってくる。教会の扉が大きく開かれた瞬間、教会の外も中も、一斉に拍手で包まれた。作法は無視し

て振り向くと、正装のアバンに手をひかれた花嫁の姿が見えた。
ゆっくりと通路を歩いてくる姿は、これまで見た何よりも美しく光輝いていた。
　神父の前まで来たアバンが、マァムの手をオレの手に預ける。慈しむような微笑みがオレたち二人を包んでくれる。
「…アバン…」
呼びかけた声にささやき声が返ってきた。
「…ふたりとも、幸せに」
思わずマァムと目を見合わせる。最前列、レイラさんの隣にアバンが腰をかける。そこに、子どもの頃一度だけであったロカの姿が重なって見えた。きっと今、アバンと共に、彼はそこにいるのだ…そう、思えた。マァムの目にも微かに涙が浮かんでいた。

誓いの言葉は、緊張したけれどつつがなく終わった。マァムを大切にしたいという思いがあふれ、涙が出そうになる。そして誓いのキス。こんなに大勢の人の前で…しかも、ポップやアバンの前で…と思うと恥ずかしく、羽のふれるような一瞬の口づけになった。

皆から祝福の言葉をかけられながら、マァムの手をとり歩く。結婚式…という形をとることに当初は抵抗があった。オレだけなら断っていたところだ。マァムのためにやらねば…という思いがあった。だが…違った。皆の前でこれからの人生を誓い、皆に祝福されることは、まだどこかにくすぶっていた「本当にオレでいいのか」という不安を払拭してくれるような気がした。

村長による『乾杯』で始まった披露宴は、思った以上に盛大なものになった。もともとこちらで用意していた食事に加え、テーブルにはアバンがカールから持ってきてくれたご馳走（この用意で遅刻したのだろう）と、公務で欠席しなければならなかったレオナ姫から届いたご馳走が山のように並べられていた。皆が和気あいあいと飲んだり食べたりしている中、アバンのスピーチが始まった。
「あ、みなさん、どうか食べながらで…」
壇上に登場したアバンに一斉に拍手が送られる。

「カール王配、アバン・デ・ジニュアールⅢ世と申します。ですが、私はカールの王配としてここに居るわけではありません。私は今日、親友ロカの代わりにマァムをエスコートし、ヒュンケルに送り届けるために、ここに来ました。
ご存じでない方もいらっしゃると思いますので簡単に説明すると、私は昔、ここにいるレイラ、マトリフ、そしてロカと共に旅をしました。私にとって、輝く宝石のような大切な思い出です。その旅のさなかに生まれたのがマァムでした。また、新郎のヒュンケルは私の一番弟子です。彼が子供の頃、二年ほど共に旅をしました。私は彼に剣を教えるために『先生』になりましたから、今の私があるのはヒュンケルのおかげですね。先の大戦でも、マァムと共に必死で戦ってくれました。彼は私の誇りであり、何ものにも代えがたい大切な存在です。そのヒュンケルが、大切な仲間の愛娘であり、また私の弟子でもあるマァムと結婚すると知ったとき、どれほど嬉しかったか…言葉では表すことができません。
ヒュンケル、マァムはまっすぐで聡明で、強さと優しさを兼ね備えたすばらしい女性です。でもね、他人のために尽くすあまり自分のことは後回しだったり、自分がつらい時にも弱音を吐かず、我慢してしまうところがありますね。あなたは夫として、マァムの心にいつも寄り添ってあげて下さい。常に強くある必要はないのだと、時には自分の弱さを認め、人に頼ってもいいのだと…マァムが心の底から実感できるように。
マァム、ヒュンケルは何事にも真摯に向き合う誠実な性格です。また、その強さが際立つので表面には見えないかもしれませんが、優しすぎるほどに優しい子です。先の大戦の傷は、身体にも心にも、まだ深く刻まれたままです。あなたを幸せにしたいと思いながら、自分がその幸せを享受することにはまだ臆病なままでいます。マァム、ヒュンケルのそばにいてあげて下さい。時間をかけてゆっくりとその傷を癒してあげて下さい。特に何か特別なことをする必要はありません。あなたと共に暮らしていくこと、それ自体が彼を癒し、幸せにしていくのだと思います。
ヒュンケル、マァム…ふたりとも結婚おめでとう。どうか末永く幸せでいて下さい。」

スピーチを終えたアバンがオレたちふたりを見つめている。こらえきれずに泣き出したマァムの肩をそっと抱き寄せる。

あなたがオレの『先生』になってくれたこと。
ずっと導いてくれたこと。
オレは、決して忘れません。
あなたの言葉を胸に、マァムと必ず幸せになります。

アバンが微笑んでいる。
伝えたかった言葉は、届いたのだとわかった。

大きな拍手は、いつまでも鳴りやまなかった。